

@Tokyo Tram Town Plan

Shinpei
Taniguchi

Motoko
Tanaka

Shin
Nakajima



トラムをきっかけに考える
東京の新たな都市生活の形

「Tokyo Tram Town 構想」

東京文化資源区域内には様々な文化資源が点在しています。そこで、文化資源区全体を巡る新しい回遊ルートを整備し、東京の新たな生活文化圏を構想することが求められています。1964年の東京オリンピックをきっかけに生まれたモータリゼーションから50年以上経過した今、2020年以降の都市空間を考えたときに、速さではなく「スローモビリティ」によってこれからの時代にあった都市環境へと転換を促し、そこから新しい生活スタイルを支える仕組みづくりを模索する。それが「Tokyo Tram Town 構想（以下、TTT構想）」です。

「もしトラムが通ったら東京はどう変わるか？ そんな一言から始まったプロジェクトは、トラムが走るという具体的な仮説をもとに議論は出発し、そこから交通や文化体験、経済活動など、様々な広がりを見せは



じめてきました。そう話すのは TTT 構想の座長で東京都市大学・都市生活学部の中島伸さん。



第一フェーズは2016年冬から2017年にかけて、専門家や講師を招いた勉強会やワークショップを3回行いながら、TTT構想の可能性と実現に向けた課題について議論を行いました。これらの過程がTTT構想の骨子としてなっています。

スローなモビリティをきっかけに都市を考える

「ワークショップでは、文化体験をいかにつなげるかが最初の議論の軸でした。そこから、二回目のオリンピック以後の東京のあり方へと議論がシフトし、移動手段としてのトラムだけでなく、都市生活として新しいモデルが描けるかという流れに次第になっていきました」。プロジ

エクトマネージャーで博報堂の谷口晋平さんは話します。スローモビリティの導入をきっかけに、トラムというハードのみならず、ポストオリンピックにおける「新しい都市生活像」を産官民学の壁を超えて議論し始めるようになりしました。

ワークショップ後に開催されたラウンドテーブルでは、テーマに関わ

る有識者や関係者を招き、これまでの議論をもとにしたTTT構想の概略について発表。

自動運転等これからの自動車のあり方が変わる時代に「そもそもトラムなのか？」という指摘をもとに、可視化された線路による軌道によって都市の骨格を浮かび上がらせエリアが広がって

浮かび上がらせエリアが広がってることの体験そのものの価値や、都市の風景としてのトラムがもたらすある種の「ノスタルジー」をもとにした、2020年以降の新たな社会

新たな生活価値の提案についていくことの意義について議論が白熱。職業や立場を超え、トラムを発端に都市生活の未来について活発に意見を交わしました。

「スローなモビリティを考えることは、人の生活や都市のあり方を考えること。モビリティの速度を落とせば、人とまちとの関わりも変わってきます。トラムがある生活によって人々の距離が近く、暮ら



(谷口さん)

ヒューマンスケールの重要性

物理的な「トラム」なのか、それとも概念としての「トラム」か。TTTメンバーはこれらの狭間のな

かに揺れ動きながら、東京という都



元子さんは「トラムと聞く

市部における「トラム」がもたらす価値をいかにして提案するかを大事にしています。

グランドレベルの田中

と、懐かしかったりちょっと変なものだったり、もやっとする人が多いかもしれません。このもやっとした気持ちや大事にしながら、一緒に考える場を作って

いきたいんです。どんなに技術が進化し高性能になっても人の能力は大きく変化しません。本質的なヒューマンスケールを大事にしながら、

普遍性と未来の生活を考えていくことが重要なのです」と話します。

「トラム」という懐かしさに埋没することなく、多角的に都市問題について考えるため、様々な海外事例の調査や国内外で未来のモビリティについて考えている企業や研究所にリサーチに伺う等の活動をTTTでは行っていますこれらの調査研究の成果を現在小冊子にまとめる予定です。

「例えば、昔の電車遊びのようなものをトラムの最小単位と捉えることができるかもしれません。一人ではなく複数人で束になり、出たり入ったりできる。しかしちょっと不自由さもある。これをまちなかで展開したらどうなるか。トラムという言葉

をきっかけに対して異論や気付きを

Shinpei Taniguchi × Motoko Tanaka × Shin Nakajima

持つ人がでてくるかもしれません。それこそ、TTTが目指すムーブメントの一端なのです」(中島さん)

移動を考えることは、移動の「間」を考えること

「トラム」の提案を軸に、まちなかを変えるムーブメントとなるためにストーリーに開いていく。時には止まったり進んだり、ゆっくりまちなかを体験するようなものを「トラム」と捉え直すことができないはず、と



TTTメンバーは考えています。

「移動を考えることは移動と移動の『間』を考えること。止まることによって、次の一歩や次の移動にもつながります。そこには、人が佇んだりどまったりすること

で、まちの風景を変えるきっかけになるはずなんです。つまり、移動を考えるフリをして、都市の風景について考えたリシビックプライドを考えたりにしているんです。トラムが発端となってま

ちなかで物事が動き出すところまで展開させたいですね(田中さん) 小冊子にこれまでの活動をまとめるだけでなく、積極的にまちなかで実験的な取り組みを行っていくとのこと。

「まだまだフィールドワークは

足りていません。どういうゴールになるか、プロジェクトに共感する人たちが集まってほしい」と谷口さん。

「本を読んだ人がまちなかを考える行動するきっかけとなるようにしたい」と話す田中さん。プロジェクト

チームのみならず、周囲も巻き込みながらともに考え行動するようなのを目指しています。2018年度内には、これまでの議論や研究成果をもとにしたラウンドテーブルも開催予定です。

トラムをきっかけにまちについて考え、これからの豊かな都市生活について思いを馳せる。他のプロジェクトとも連携を図りながら、豊かな文化資源を活かした人とまちとの新たな関係性を構築しているのです。

(記事構成・江口晋太郎 撮影・鈴木渉)



T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、
東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。
ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。



語り聞く 本郷のキオク

今秋、2017年度に続き、「本郷のキオク」を語り聞く会2018」を開催しました。会場は登録文化財の名邸宅「瀨川家住宅」。本郷の御菓子司「喜久月」ご主人、そは「栄亀庵」女将さんに本郷の記憶をお聞きしました。本郷通りにしかつて路面電車が走り、路地は遊び場だったこと、そば打ちを覗きに行くことが子供の楽しみだったこと等、本郷に住まう人々本郷で商いを行う人々の、当時の日常の様子を拜聴しました。お店の出入りされていたエピソード等、地域内の面的なつながりも伺えました。お二方がお話されている時の楽しそうな姿、歴史あるゆつたりとした空間は、いまの本郷に生きる私たちにとって大変素敵な時間となりました。

本プロジェクトでは、貴重な聞き取りを昨年度の成果も合わせて冊子に編集中です。本郷には、地域の個性を支える魅力的な場所や老舗の商店が沢山あります。しかし、その多くが閉店や老朽化等の危機的状況でもあります。来年度はより効率を上げ、魅力の掘り起こしや発信を通じて現役の文化資源の支援を検討中です。

上野スクエアを 多角的に アクションする

上野スクエア構想PTでは、T-Cha第4号の巻頭特集で紹介した方向性に沿って第二次構想のとりまとめを行いました。そのお披露目も兼ねて、10月1日に東京文化資源会議の第8回公開シンポジウムとして、『上野スクエア』を構想する』を東京大学福武ホール内ラーニングセンターにて開催。構想プレゼン後のパネルディスカッションでは、中島直人東大准教授（上野スクエア構想検討委員会座長）の進行により、刺激的な意見交換が活発に展開されました。10月31日には東京文化資源会議の第5回フォーラムとして、『上野スクエア』を実践する』と題し、グループセッション方式で今後のアクションについて関連な意見交換を行いました。2つの公開イベントを経て、上野スクエアというエリアの可能性を改めて認識しました。現在は今後の第三次構想へ向けて「公共空間」「芸術」「多様性」「夜」等の観点から、具体的なアクションの取り方をコアメンバーで検討しています。

アイデアソンで アキバの未来を 議論する

「広域秋葉原作戦会議」プロジェクトは、9月6日に開催したシンポジウム「グレートアキバ・情報・知識の交差点」に続き、12月15日（土）に秋葉原アイデアソン2017「ライブエンターテイメント特区を考える」を開催しました。

アイデアソン (Ideathon) とは、アイデア (idea) とマラソン (Marathon) を掛け合わせた言葉で、テーマについて様々な分野の人々が集まり、グループディスカッション等を通じて新たなアイデアを創り出すものです。今回は「2020年に秋葉原がライブエンターテイメント特区となり、新しい文化が生まれる場所として世界から注目されるようになる」と想定し、ライブエンターテイメント特区とは何ができるのか、特区になった結果どのような変化を迎えるのか、誰が何をすると実現するのか……等のアイデアを出し合いました。アイデアソンイベントは、今後も開催する予定です。

社教会堂塾で 神仏習合を 議論する

湯島神社社教会堂プロジェクトは、ほぼ隔月のペースで検討会を実施しています。第2期最終回には今期の活動を振り返りかえ



り、成果を今後に展開させるための議論を行いました。

二回目となる社教会堂塾は、伊藤聡先生（茨城大学教授）を講師にむかえ、「神仏習合と神観念の変容―古代・中世を中心に」と題して神田明神にて開催。古代・中世と近世以降の神道の比較や仏教の影響等についてお話いただき、その後は講師と参加者が意見を交わし互いの興味を掘り下げました。次回講話はロシア正教についてニコライ堂で予定しています。

東京文化資源会議交流会では、東京理科大学・宇野研究室制作の当該エリア地形模型の展示公開が実現。多彩なCG画像と工夫を凝らした解説により、来場者との活発な意見交換が見られました。

「歴史文化資源特区」 実現に向けた 具体的な提案活動

リノベーションまちづくり制度研究会では、昨年度から8回開催した研究会で神保町と谷中をケーススタディとして「歴史文化資源特区」創設の検討に加え、

開催御礼！ 「帝都物語」と 都市の文化資源 のこれから

え、参加メンバーらによる関連情報の提供をもとに議論を重ねてきました。このほど、国、東京都、千代田・文京・台東区に「首都・東京の歴史文化ゾーン」である「東京文化資源区」の保全・活用に向けた要望書」を提出し、「歴史文化資源特区」実現に向けた具体的な提案をまとめました。また第1期として2年間の活動成果を報告書にまとめ、来年度早々に報告会を開催し、第2期の活動についていきます。

まちづくりを担う 人を育てる 仕組みを議論する

これまで、まちをつくる人材を育てる「プロジェクトスクール」を開催してきました。この度、東京文化資源会議第6回フォーラムとして、2015〜17年に実施した「プロジェクトスクール@谷中」をたたき台に、地域の文化資源によるまちづくりを担う人を育てる仕組みを議論する「まちづくりプロジェクトスクール」の可能性：『文化資源を担う人』を育てるまちなかのしくみを1月19日に明治大学アカデミーコモンにて開催します。詳細は、東京文化資源会議ホームページからご確認ください。



代表取締役、神田明神・清水祥彦権宮司ら豪華メンバーによるパネルディスカッションにて、重層化した都市である江戸・東京をどのように愉しみ尽くすかという議論が展開されました。今年度中には、これまでの2回のトークセッションとシンポジウムの内容も踏まえた帝都物語地図カタログを製作予定です。

各プロジェクトの今を知る！

文化資源の未来を想う場に！

「東京文化資源会議交流会」が開催されました



今年で4年目を迎える東京文化資源会議では、各プロジェクトチームの多岐にわたる活動報告をすると同時に、賛助会員をはじめ会員の皆様、メディア関係者、行政関係者、政界、経済界の方々らとプロジェクトチームメンバーとの懇親や交流を促すため、九段下にある旧山口萬吉邸にて「東京文化資源会議交流会」を11月7日に開催しました。

会場である「旧山口萬吉邸」は、築91年の建築物で文化財認定を受けた歴史的にも貴重な文化資源の場所です。交流会では1F、2F、B1の各所に東京文化資源会議のプロジェクトに関する展示発表を実施。会場の空間を活用したプロジェクト展示や活動をまとめた冊子やパネルの展示、アプリのデモンストレーション等を通じて来場者らとの意見

交換の場が作られました。また、地下では東京ビエンナーレ2020構想展を実施し、東京ビエンナーレ市民委員会のメンバーらによる展示の解説やトークセッションを開催。100名を超える来場者らとともに、東京文化資源区で行われる様々な取り組みについて理解を深めながら交流をすることができました。

当日は、ご多忙のなか石井国交大臣も駆けつけていただき、文化資源会議に関わる面々と交流いただくなど、文化資源を想う様々な関係者らが集う一日となりました。今後も、東京文化資源会議では、各プロジェクトと会員の方々との交流や連携を図りながら、皆様とともにこれからの東京の未来、文化資源区の未来を築いてまいります。

編集後記

今号の特集は東京文化資源区を「つなぐ」トーキョートラムタウンです。本郷―神田―秋葉原―上野といった範囲の移動は徒歩や自転車ですることが多いのですが、理由の一つに積極的な理由として歩くことで街の景色を楽しむことができるということ、もう一つが消極的な理由で実際にこの地域をつなぐ公共交通は少し不便（不便と言うと叱られますので「少し」とします）ということがあります。ここにスローモビリティが実現すると、文化資源区の楽しみ方が多方面に拡大するのではないのでしょうか。（陸）

旧山口萬吉邸で開催された東京文化資源会議交流会では、各プロジェクトメンバーと来場者ら100名以上の方々との熱気に包まれた一日となりました。ご参加頂いた皆様、ありがとうございました。文化資源区を軸に様々な人との出会いやつながりが生まれ、そこから新たなプロジェクトが立ち上がること、それこそ、東京文化資源会議がある意義だと実感しています。（江）

11月7日に東京文化資源会議交流会が開催され、各界の皆様にお集まりいただきました。お天気に恵まれ、会場からあふれた歓談の声が秋の夜空に広がりました。年を重ねることにお集まりいただける人数も増え、縁のつながりを実感するイベントです。ここ数ヶ月、事あるごとに「平成最後」の決まり文句がよく聞かれますね。もちろん節目を大切にしつつも、これからもじっくりと、未来に続く活動に取り組んでいきたいと思えます。（雅）

T-Cha

[ティーチャ]東京文化資源会議ニューズレター No.6

深み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：渋井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)、野口雅乃

写真：鈴木涉、川島彩水 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2018年12月31日

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1 TEL：03-5244-5450 FAX：03-5244-5452 MAIL：info@tohun.jp URL：http://tohun.jp/

T-Cha